# 「アブラハムとの契約」（創世記一七章一～二七節）

## 1　一三年後

創世記第一七章は私どもに、九十九歳のアブラハムのことを伝えています。アブラハムについて創世記は、年を追って、その年に何があったか、というような書き方をしていません。

聖書の基本の書き方は、神と人、あるいは神と民との関係を、イスラエルの歴史を背景に書くということです。今日の箇所にあるのも、神と九十九歳のアブラハム、更に（まだはっきりした姿をとって現れてはいない）彼に代表されるイスラエルの民とのあいだに起こった出来事です。

さて妻サラの召し使いハガルによってイシュマエルが生まれたのは、前章、一六章にあったように、アブラハム八六歳の時でした（一六・一六）。それから一三年経っています。

この一三年、八六歳から九十九歳までの歳月、アブラハム物語としては、いわば空白の一三年を、どのように考えたらよいのでしょうか。それはもしかしたら、アブラハムの生涯を追うに当たって無意味な問い、変な疑問に思われるかも知れませんが、じつは必ずしもそうではないのです。

この一三年間、記憶に値することが一つもなかったというのではもちろんない。むしろ聖書は、もっとも知る必要のあることを、御霊のよしとするところにしたがって書いているのだ、そう言って、この一三年について説明しているのは宗教改革者カルヴァンです。

それでは、カルヴァンによれば、私どもがここでもっとも知る必要のあることとは何でしょうか。それは神がアブラハムの軌道修正をはかろうとしているということだというのです。どういうことでしょう。アブラハムが間違ってイシュマエルに跡継ぎとしての期待をかけている、そしてそれに安んじ、満足している、それは彼が「見せかけに欺かれている」（カルヴァン）ことなのです。サラの女奴隷によって子を得ようという、神の思いを実現しようという情熱、それは御心に適わなかったことだったけど、そうした情熱も失せ、救いの契約を継ぐことのないイシュマエルに満足し、願いがかなったと彼は思っているのです。

大きな、信仰の軌道修正が、アブラハムには必要なのです。それを私どもも知らなければならないのです。今日の聖書箇所は「主はアブラムに現れた」（一節）とはじまっていました。神は御使いによってその思いを伝えたのでもありませんし、幻の中で語りかけたのでもありません。「現れた」のです。そして直接言葉をかけられた。アブラハムが間違った道を突き進むのを神は許さない。そこに神の慈しみ、厳しさの中に示される憐れみがあります。第一七章はそれを証ししているのです。

こうした長い、いわば空白の期間をへて、神がなおも私どもに語りかけてくださるということ、それは、その期間の長さのいかんに関わらず、私どもも経験していることではないかと思います。私どもにもたいてい「アブラハムの一三年」というのがあるのです。

若い頃に、何かをきっかけとしてキリスト教信仰について知る、でも就職だとか結

婚だとか、あるいは別の仕事、興味や関心が大きくなって、長い間、聖書なんか忘れて暮らしてしまう。あるいは、キリストの福音を知らされ、それを受け入れ、洗礼まで受けたけれども、何とはなしにあの「アブラハムの一三年」に陥って、自分としては満足しながら、ずっーと来てしまった。しかしそれでも、神は、私どもがこれでいいと思って、つき進んでいるときに、一定の時間をへて、もう一度語りかけてくださるのです。そうであれば、そのことこそ、神の憐れみ、神の恵みと言わなければならないのです。

神が昔、アブラハムに、七五歳のとき、祝福を語ってくださった、祝福の基としようと語ってくださった（一二・一以下）。あなたの子孫には、あなたが歩いたすべての土地を与えようと約束してくださった（同一五節以下）。アブラハムは忘れているはずはありませんし、何より神は忘れていないのです。神は恵み深い、自らの言葉に忠実でいます。それが第一七章が証ししていること、その意味です。

## 2　契約と割礼

改めて一～三節前半を読みます。

アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。わたしは、あなたとのあいだにわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう」。アブラムはひれ伏した（一～三節前半）。

二つのことにここで目を留めておくべきです。一つは神の語りかけです。「あなたとのあいだにわたしの契約を立て」るとの言葉です。もう一つは、アブラハムが「ひれ伏した」ことです。この二つとも、一三年前から、いや二五年前から変わっていない。ただ「ひれ伏した」という言葉は、アブラハムの信仰と服従の思いが、前よりずっと強いものになっていることを示しています。

短くないブランクをへて神の言葉が聞こえてくる、自分のその間のいろいろの歩みをへて、喜びも悲しみも、失敗も経験して、同じ神の言葉が聞こえてくる、その時の私どもの耳の傾け方は、前とはまったく違ったものになっているのではないでしょうか。アブラハムにおいてもそうだったように思うのです。とくにハガルによって子を得たことは、彼がいわばあせって、待てずに、サラの言葉を聞き入れ、そうしてしまったことは、彼にはずっとこころの重荷になっていたのではなかったかとも思うのです。そうしたアブラハムに対して、そうした恥じ入るような思いを拭い去り、もう一度神の示した原点へ帰るべく、神は呼びかけられたのです。

この、全体がここでは「契約」と呼ばれる神の言葉が、神がアブハムを離れた二二節まで、この章のほぼ全部を占めています。込み入ったところがあるので私の言葉でまとめて言えば、三つです。

一つ目は、神はアブラハムを多くの国民の父とし（五節）、彼を父祖とするイスラエルの民の神となるということです（七～八節）。そういうアブラハムを表すために神は名をアブラムからアブラハムと変えるように命じます。「ハ」の文字に「多くの」という意味が入っています。

二つ目は、割礼です（九～一四節）。そして三つ目は、アブラハムとサラとの間に子供が生まれるとの約束です（一五～二一節）。この三つが、神が約束、あるあは命令として語っていることです。今日は、割礼のことを最初に、次に、イサクの誕生予告のことを取りあげます。

まず割礼です。男子の「包皮の部分」（生殖器）を切ることですが、ユダヤ人のあいだで古くから行われてきた習慣です。

今日の箇所は、どのようにしてユダヤ人の間で行われるようになったか、由来を説明している箇所でもあります。まさに「契約のしるし」（一一節）として、父祖アブラハムから行われている、神の民であることを証しするもっとも由緒ある伝統だと言っているのです。

もちろんこうした習慣は、今日、人類史的に見れば、ユダヤ人から始まったものでも、ユダヤ人だけがしているものでもありません。インド・ヨーロッパや蒙古などにその習慣はなく、日本にもないのですが、エジプトやアラブ、西アジア一帯の民族はそうした習慣を太古からもっていた。ユダヤ人はアブラハムと共にカナン入って、他の諸部族の影響を受けてするようになったものです。

しかしイスラエルの民は、長い歴史の中で、これを神と民との契約のしるし、聖なる神の民への加入のしるしとして重要視し、私どもが知っている新約聖書の時代にまで、また今日でも重んじてきました。安息日遵守と割礼が彼らにとってもっとも重要な掟であって、無割礼者は、神を信じない、そもそも神をもたない民として軽蔑されたのです（エフェソ二・一一）。今日は詳しく申し上げませんが、新約聖書は、割礼を救いの条件とは考えず、割礼のあるなしに関わりなく、信仰によって救われる道を強調したことは言うまでもありません（ローマ三・二〇）。その意味でパウロもしばしば「心の割礼」という言葉を使ったのです（同二・二九）。

ですからここで確認しておくべきことは、割礼は、アブラハムが受けた恵みの約束のしるしとしてなされるようになったということ、割礼が何か救いの条件のようなものとは理解されていないことです。その点で新約聖書の理解は正統です。割礼をアブラハムとその一族はみな行い、神の民として自覚して歩むように、それが、一三年後の、新しい神の戒めです。

## 3　神のユーモア

イシュマエルが生まれて一三年後、神が、アブラハムの歩みの軌道修正をしようとしたことの三つ目、それは、イサク誕生の再度の予告でした。

神はアブラハムに言われた。「あなたの妻サライは、名前をサライではなく、サラと呼びなさい。わたしは彼女を祝福し、彼女によってあなたに男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福し、諸国民の母とする。諸民族の王となる者たちが彼女から出る」。アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、ひそかに言った。「百歳の男に子供が生まれるだろうか。九十歳のサラに子供が産めるだろうか」。アブラハムは神に言った。「どうか、イシュマエルが御前に生き永らえますように」。神は言われた。「いや、あなたの妻サラがあなたとのあいだに男の子を産む。その子をイサク（彼は笑う）と名付けなさい。わたしは彼と契約を立て、彼の子孫

のために永遠の契約とする」（一五～一九節）。

妻サライもここで名前をサラに改名されます。アブラハムのときのような説明はありませんが、女王、女主人という意味は変わらず、サライはサラの古形のようです。二人とも名前を神によって更新されます。神の歴史をになう者として新しく任命し直されたのです。

この新しい歴史は、神の大真面目な託宣から始まります。神はアブラハムにサラによって男子を与えると約束します。アブラハムが一〇〇歳でサラが九〇歳であることを神は知らないわけではありません。神はアブラハムを、笑わそうとしているのでしょうか。

これを聞いてじっさいアブラハムは笑わざるをえなかったのです。失笑、といったらいいのでしょうか。つい、クスとしたということです。人は真逆のことが一緒になっているとつい笑うのです。「一〇〇歳の夫と九〇歳の妻」、「子供が生まれる」、ご冗談でしょう。

神がアブラハムを笑わせたのです。長くなってしまった、もう一三年にもなるイシュマエルとの生活の中で、彼が跡継ぎでいいとアブラハムは考えていたのです。「どうか、イシュマエルが御前に生き永らえますように」（一八節）。そう考えるのが常識と言うものでしょう。しかしそれはカルヴァンが、アブラハムが「偽りに欺かれていた」と見た事態です。人の常識を打ち破るもの、それは神の非常識です。神の馬鹿げた託宣です。神のユーモアです。なるようにしかならないのではない。人間の必然を越える神の必然が問題なのです。

もしすべての始まりが私どもの側にある、私ども人間の認識や願望や希望にあるとしたら、むしろこれほど絶望的なことはありません。一〇〇歳と九〇歳の夫婦に子が生まれる。それは人間的には馬鹿げた話です。でも、です。イエス・キリストもまた処女（おとめ）マリアから生まれたのです。神が人となって私どもの間に宿った（ヨハネ一・一四）のです。その時、神と人間、人から見て一緒にならないものが神からして一緒になったのです。そこからすべてがはじまった。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」（マルコ一〇・二七）。いわば針の穴をらくだも通りうるのです。

同じように、使徒パウロも、アブラハムの信仰を、こう言ったのです。

その頃彼はおよそ一〇〇歳になっていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せないと知りながらも、その信仰は弱まりはしませんでした。彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました（ローマ四・一九～二一）。

「知りながらも」です。それは人間としてのアブラハムの正しい自己認識です。自分の体が衰え妻が不妊であることを彼は否定いたしません。しかしそこに留まることもしませんでした。「その信仰は弱らなかった」のです。彼は、神の、いわばいたずらとしか思えないことに自分をかけます。なぜならその神は「全能の神」にほかならなかったからです。そこから自分を見直した時はじめて、彼に本当の将来が開けてきたのです。

（二〇二〇・七・二六）